老談一言記　巻之三

一　志ゝ田伊豆守内市川勘助といふもの頭雪折にて死しける
これは先ごろ川よりきれ木をきらんとするとて我がひきいる足軽
三人つれて山中に木やとうけて居たりしにある夜風外に
あらしてすみやかに帰るべしと追出すべきにすのそと聞に
答るに及ばずたゞしすみやかに帰れといふそのうち夜
もに入りて帰りさらんとするにあらかじしと云之勘介に我
なかにするもの命あれ　入りしかればその果さらんにと帰る
きかなにべからずといひしによりし目にあてみせんするかれども
いひて忽雪折にて本をくだかれてみなしもたまた死するの折に
いきながらふるものはかりてかしといふさてやむつきにあらねば
勘助が日職のものとやりぬると勘助が身のそみなりてゆき

かりめくし出る足軽どもよくしいひとつへてゆき
つ又し退かれ了りそのこしその時ハ鉄炮と一時に
ちゐちられども其後ハ怪ケやみしと伊豆守殿いひしと或人
語りき

一 僧清霖やせしハ呉服やの何某といふ者の妹此ちるき琴の
めづらしきをもち出すその音よりも為になりけれバ近藤殿其
ゆしにうられど試給ふによりて為なりさまぢハ琴ノ上に命じてなど
きて見給ひしに時雨といふ給ふ小糸の次ぐと時雨
といひしにてれハうらみ所をなしそれあるりそ賞し
給ひぬ大きにらしども其の欲に
給ひつくきなるよりはらもとてとらこるを今も若き時ある者
とよみ給ひしとぞかの呉服やの名称たつねず

一 城ある一何度の時に何某といひし武功のものをありて三国に
こゆりしを郷士共ちこれも武功のものあつき橋て
来と作らんしかり為之やけるハ某つい主人とふすてらるし
給をかりふりてきふ也さふんハ家内の趾にあるつかるとかまわず
たくゆけやとしかるをさんなうちてすてよとおぼしめさふハ
旅すとやあふあふすとてゆきていかるや力てめけんつきたちて
舟のせてもふいて来つ力をとさしせらり給ひけり先ゆの者
足軽ふといふをの女人まかりつかまつられしかしとまじら田しき
舟に入りしが為之小男にてかれハ大力なり大男ヒいらて力ともさせ
てうちとけてあるにもかゝる何そのものゝ為之ハ
兎さきかかるに縄をかけて舟をうかまじもやらて為之が舟
ちらに舟をまふよりかの居茶をとそめられいられ飲けり

ふみよねかくらしてゆくにすてに城やちかく なりしんおもふにかれ
男づふと云こえ入ありすたと人ども驚きて 我に浮ることを
ゆるさと皆こたふんとせしに露兄は其のまゝ小舟の舳さきに
跡うちかけ居たりしが此のよみて膝をたてゝ皆をさへ
登りふすいつくらのれへき此一団ゆうち のりすは海をと
川をとさし云んことある事をきてあるこたし今にかくるき
あつへきぞ此船さしよせてといふうちにあまた江へかゝりしかある
ありぞあれ石に出川す船さしよせて同しく孫顔うらく
かたるとしあけのまゝでも高股きりてときれてうらみおもう
露兄かとひ入てつんせ切て刀と鞘にてさき先しゝと後をみ
とるものふしてや云ざのおとど人々大にふあるきてうりめして一伯負、
集りて石川迄て来りしふかゝるのことし為りしてとこれは秀吉

の具足着て此下りきは夜ごふきりしかどかく大刀をやさしをは
きらうちりしたるめ旅しに豆龍研叡まてひとやしりおひさう梟みとて
騎兄うちゝうふとも見てむらひし花塚惣左衛門に老人の荻田隼人
に渡るて為賀す一と一度て火しに荻田の豆龍研釵とはなを
そこそひしに花塚いうく馬いふく大豆と刻みても龍馬とも名刀
いふし研ともいひてかけり叔こふりいにの心まていひてやせし花塚
いふ北五十石ぞうり船かり 露兄が時にいひ皆引立ありしや

一 井戸忠右衛門にて 此は井戸若狭守は明智が親族なりき
牧屋殿の城にありしに明智がいひしは集とものふとある
親のみうたう人々いは大国にかゝふにちは小国一つは気なやりしにこひ
右と若狭守も 聞をうめぬ親とて居ていへしうゑのかにに先
秀吉に謀反せしてられは光秀さとつかでかひ居りかる千一般一文なり

まう経へといひしかハ人とゝりとて只一太刀にきられける
不のかはとと立さうりきこしに堅房いふこと某かれとはうらう
いつくとのかゝへきにあふも志つまりゆへて宗悦にも志うハ
あふも某か粉てうこせうり某つことかうふてはかうなさるべき
かれらといひけるかって此了京職ふらる川たすに時は
不因板倉周防守為人ゝ中不ハうまことく理りなきにあふれ
周防か心ひとつにてハ那しかしとて関東へ申されしかの野尻
るまることをふせよと仰かされしかハ周防守堅房とのし
ていふかして事けるやととゝひ関東へ申せしかと
今ハちからなしといひけり宗悦きゝていうてさゝるまゆへ
きにて某か首をうてめさるへきれとあふそひしかど関東よ
の御意ハ此ハいかにふましとて堅房服きらりける宗悦かが

なにとがなき堅房かしふいていかてか世ふあかりて人と面と
はらすへきとてさりふふこれもをかう切て死けり不のとの
ことあららみて到思召ふ為人か志たゝ浅て河瀬名にて堅房
かうを本ときふみしとえさうらしとの隠ふ

一 駿河守宰相殿の御代に松平丸太夫東條三左衛門と云二人日頃のを
あらてのつことあられしか東條三左衛門て病死せり松下ハ罪
あるふ決して又ゝ三人ともにきられける其時宰相殿仰に
東條いきてあらんかハ是ひとくをも逃かさすで死にたれハ罪は
免ゝを決かきさる又とて至れかゝる処をにれんとて命助りて
禄をはなちふされける石高此の御諚ありて九年なすしかと云也

一 森宗朗といひける茶の湯墨蹟かゝりける円悟の墨蹟ありけし
ようをしまれける比は芳南院をといひし禅僧薩摩の浦へ

漂来る翁とよりよふ筆てみきハ円悟ろ虎丘への印証
?十六人の跡ありそれを京へもち来りて古岳和尚へ見せ
?る堺の浦の谷宗印といひし茶の湯ニすきけるもの大
徳寺より申ふいゐてその墨蹟を二つまて一つハ祥雲寺ふ
寄進し一幅ハ宗印掛物とし?えてとゞけし?墨蹟ゟけし秘
ふり千?円悟ノ真蹟二幅それりけるし織田有楽斎?て祥
雲寺の和尚もの?しりとりか

一 紀州の安藤帯刀南龍院との?へ申せしハ彦坂九兵衛はよくさ
やつりて我か家へとて不?我也又ゆかしで天性不?ゆへども
けるのかふみも所用に?ゆきものそれより心してめつる
べきはともうされし又酒井讃岐守殿の?紀伊殿へありしてもめさし
申されしふけ?なのこゝ?ゑを?てた讃岐守のゆうりの?

ふてゐゆへ其?の缘ニまうせしゆへみふしりのためにとも?
?さうしろ?ハかふいかうし待るゆゑうしあ?とて一生伝
もふくありし?又紀州?所?様へ帯刀は所?師とつき?し
ふ其後の?所?様へ入て所?掘せしをあふられて?
伊豆守?より内?して井伊掃部?よう 石谷?堂と使?
て彼所?師を切てやりけ?すとゆりしふ帯刀ふかく怒て
そもそも云う彼所?師?さふんしと?すると?は如何ふ思ひうけ
其後の?横ふうしら人ニハ某切?侍ふとをうらう掃部よ
それハ心得?しきて石谷とおつふれて帯刀のかくへゆかれしに
我?しく家へ今の掃部ふる?ゆそて すれきと??かき
りふしよろしいとも?待るきてハ?堂へかされけれとも
はしきれかくてきしれは?堂へ申せしおもし??きものなハ なる

まことなるかな善にしとて家中の栄みなかりけること
ありしてまろてせんとてものすめあし や反もそれと
同じんに上をとうしことも少し給しに家中ならなれとの
禁獄となりいもれなきぞとあるぞとも少し給へども上
下まつれて此石枝のつぶのをかりしおとふつみに世にふ
こしそしることにあらしとしくる所に給ふ主れのみ
かりて主を上とをし給をさりしおもふつとにあるに
給ひしとなりつる世にあし志ある人にしよく候に
つきるなり

一　松平豆州信綱代官に安松金右衛門といふあり豆州の仰に
野火留といふ所へ多摩川の流をひきたらんには開発の
田地も出来べきやいかにやと議せられしにいかにもよろし

かるべきよしを申す凡黄金三千両を費すべけれど
ありしかば豆州仰にて我此所を傾すとも又はいづくにか
うつりなむも志らず我三千両の黄金を費やして
ふかく此地の利あらんかぎりは公儀への奉公なるべしとて
安松に命じて多麻川の水をひかんとて十六里ほど溝
洫をうがちて新河岸といふ所までかりて水流れ
入るかと待にさらに水来らずして一とせを経られけり
豆州安松を召していかにしても水のこぬるとありしにいかにも
水は入るべきまま待んにふるさまみと有けりぬとなむすと
いかにその故いかにとありしかどいまだそれよりとは不知
侍るぞとこそありけり又のとしみとせ水入らず又安松を召して
とふ同じとそれしらずさりとては水は入るべきなりとかや

かくのごとく侍ること過ぎし　不審にたゞしは此地は武蔵
野にて侍れば　とまれ　河内の郷の人家はみなこなたさ
みしに樹紙などとしきては其よれびそれとゆきしてさ
て清し侍ることは此かたちこそ　ありとて限つくまであれば
たちまち世中の塵埃うかびこれ侍るがなごなる
に今はかは塵埃むかしの名にし侍りけれども
武蔵しの江うへ侍りし事は昔としふどゆきにふ
ゆきつなぎ見え侍りける多麻川より此溝にながれ
入りてひろき地にひき侍る故にいまぞ流れ来
るなどのよしは侍らぬとしや此の広野よみちくるかん
のちかなにはながれ来る悪き物となすと答ふ羽生
又右衛門といふ代官これをつきとりけれどもやがて

めしたづねられしにされば ことし など野にうくしな
のゆゝしなることは見え侍りすと申せしかど遠州又のさ
まかりもなし又なとしになき来らず此時安松と
いひてしるし置かれしかどもこゝをきてなれども此
が地みなもとをつまびらかにせざるがなにか流るゝに
堀ありしやといはれければおどろく気色もなし
之年といふ秋大雨ありける後に雷の鳴るごとく
なる音おびたゞしくとゞろきて此溝にあふれみち
て平地ともなくばかりに六七寸ばかりあり鮎の魚の
ながれ来るもとびありく　たゞ一時に十六里が
あひだにながれきたり新河岸の川にながれ入てかゝり
きるなどに田地もそこなひて　堅大なる二百石の地たち

まち二子石は地となりぬ豆州の松をうつしてはさし
此口が主の池に海をせめうけるにつなぎとどめしを
所しかるに溝を隠しなんとせしことの結句
に覚ゆる折ふしとて一倍の禄給りて二百石にあさ
れけるとなりしか次第に運あがりてよき職をつき
にけり
一 織田の中納言との御時因州佐々木といふ人の父なる
武功の者なりけれは御あつかりしを後々ときは斎藤不の
地にかくれは本多伴左衛門に仕しておるたとよびける
この人は六孫大忠澄的孫にて（忠澄）太刀今もてるる
孫につたはり三尺ばかりの太刀なりことなると
むかしなりしとひとしと語てもさびあることなり今

ときたらん所にはかくし其家の紋十万の二字を
木瓜とともにけりとぞ
一 岩根田菴といふ人友堂か家臣なりしは伊勢朱市にて友
堂知行の内二万石ハ友堂か家臣少輔とありしとや
家臣にて但馬に湯治せし時柳生但馬守と参会してそこはさ
やうにおもはれへきにもあらじといひて帰りて
ここをしかられも大猷公よりめされしより宮内少輔
此由を藤堂大学守へ申されしかれは大学守へ
も同しくすゝめ申さるへきにさはことなくかかりける大学
守これをいふてか老中方へめくりて其の家人めされし
とおもひけるに御用にや早速とゆるされし候ハヽ
がくめしかかりて又六十日帰るのうちゆすゆるしたと

川といふは川の水は山より落しておつる故に雪とけ
て雪水来る時は此舟なくしては川とびなくしてはわたされてとを
舟橋をかけたるなり　されば北国の大雪といへるは
此下巻のすゑ面につらねしは其事わけあれどもまた
積る雪解て　のちに流くに留まれる中に雪
多からは越しまして山の木となりてもいして山より
つもりし大雪は一時にとけて来りしんには城の中の人家
まで水の中になりて人民魚となる　すなはちの
為にすなわちこれ入りてそれぞれ損亡年にいくらと
いふをしらぬなりとや　又此山雪流くにわたれは其夏
も水ありて其れを流すへ引て田の為にもして早そと
損亡なしとは雪一時にきゆるなど有りぬ其は大なる害

は渇もし水旱ふたつのそんがふ一二年とおすしを
幾万両の損却になるへきもはかられずといひし
なるにそれはことなきぬし

一 越前へ青沼流といふ兵法者来りて仕合して家中の
人々皆雌伏するほどなるに立花奈をつといふさむらひ仕合
せんといふ　此人はかねて術ありとも聞えぬ人なると
おもひしに其日にいたりて侍衆あまたよびあつめられ兵法
者を人と請しより家のうちの戸障子みなとりはらひ
てさし一間にしつらひたり兵法者人これを見て先鉄
のごとき棒をたずさえて仕合しなんとある　へらぬ
さらに鑓長刀のるいかみとあらずといふ立花きゝて
いかに棒をもと用ひつきといひて奥へ入て漁人はきる

腰にさんなどの布のかさをふふたすきかけて唐烟と
もちおて来りさぶらふをいふなとこそあれ乃の名はおの人
をまろしと烟にかけてまにあつていかにやいかにと仰伏
しけるをいはし只ゆるしてけり此立無双なき唐烟り
これは上にみてあはしらかしをうけいふ名清のさあらま
けるにあらねハかしても青沼流ハかの家中にて人と
まなびしとうしきるにてあはしと不為の様ふ

一 不為の様ふ厳有公御幼稚の比ホ戸殿は本人在京の人
ときらりなきふく自然御お仕にありけし松平伊豆守
信綱太田備中守ひそかに振てホ戸殿をの御お仕て
とゞめられよとてつかはし太田いそぎて来るふふ
御橋はおよりまて水戸殿へ来りあはてはやしとや申すに

戸よりいと気色快らず御出仕あるべしと但りれハ太田
某に来りてとゞめまいらせよとて来りけれどもして御
お仕あらんにハ某面目をうしなひまげて某からぬふたりは
るとてかしも様子ずと申りまじハさらハとて御をせ をらん
けるをれ夕さ信綱此戸殿来るすこぶる御不機の
るにあらんとしおは様もす信綱申すべき一とありて来り
侍り御寝所まてまりとも見来にへりまいらせ我とかさね
て申つましハあらせ様ひつり信綱畏て申すを様太田と
して御お仕をとゞめさせいらせ度ハゆめんよかつふすめやれ
働き某からまうひ申をしりては当代いまに御幼稚にはし
ませかつくだしるはお家しふとのだをお仕ととゞめをそれ入
らせおのとなる御お仕ら案なきとなしけりんにハかきり ふき

あまた人の名簿や何某は誰がかたにて志かしのるを
つききとめるやりし世にもありける事なれど此人々は
なりさりそれは根性もかりみにまてなさりける
これる人のためにへりそれはとて或人のためとす又何某は
誰かためて志かるの中の其人をなりこれも志かるべき
ものなきもとて或人のためとほかれてとききりのも皆
死するのためとゆへしこれをそのかなみえせし我も
たすことも命たすけられまへらせしにいるりして一致
此国恩を報しまいらせんとおもひてかくる事とかりし
りと天下のためあらん時千二百のそてひきおてうち死
せんとおもひき今世おさまりに居しても其ところさし
もなしくありけり 今は名簿我かとゞめても せんなし

我なきなりし あとまても をのれか先祖はかくありしそのかみ
子孫に語りて伝へよとて これをとゞめ見することとも
庶くて やきすて死しけるといふはこれ仏の家人の
物語とて侍りける

一 越前の宰相殿参議になされんとせし時 大猷公老中
とめられて三家の人々にさへ重しその僻の備ぶんの者
とも事随し三家の人々につゞきて世の事であらんも重り
我名代にもあしさんもの事時にあたりては誰なるべき推参
せよとありしかは三河守殿の語られ大名ともとゞめしは
体縁なるとのまゝて三人ぞ八位色られとありけれども
八四品の位をたまはりてけりかりし参議にてそや
なさめ給ふ 宰相殿も なされけるや其の代々にはかく

も
例の一さん呈せられけんには所務人とありしかとし
ちかふこれハいつも杉田かいふことは忠昌もきゝ給ひし
かなかるべし　すでに杉田か條目てもちいてこれをさし
おせらるを改ためたまひしと語てやうと思ふて別せん
んとせしにおのゝ推案ふる中川か方かろき中川
ともかくてさかとまでせしかきぞうしそれにまき
見えたてまでやすかし術を用ふるとうけていかり給
ひしかハされハ業用後のもれようかしき擢用させ
まひけへもいかゝとして御目をも損しいかやうと
御意きハかくハやしまさうとてハすらんにへられ語る
急ふれと元よりは流してひしかも忠昌つらくと
かれか様をとえて流をあらし語ひてさらふいえよふつる

まてあるとて充せられしかりつゝみよりてそれてけ
よく心得しかり氏をそれみるハゆるしけれ忠ふされハ秘いかう
清しやうとも覚えぬことの語ふ杉田中ハ広ハ大坂まで御
命をすてられてまでかゝる御身とはふり語ふける
ふし語まて御身終り語ふつらんハ御家のために御命を
すてらるへきハとゝ申す忠昌涙しくさて語ひて申す
不埒なる人より三ケ條目をしらし申まて志く分包して
の語ひしとき忠昌らせ語て先通代をさり語ひしのち
ある時国に入り語ひしときあやうくとてあしあつめ
てそのと儀をられしつねてに大阪の御出世のみといゝ
おらふしてまそう語ふてきかふしけれ今世にと
もすとこし御年をあとさうりにありしまう

べき事なれどもその語ひしうえに老ども作はこしいまだ世に
ましますむかしいくつもりあひそおもしせきの
人まで知らしめし語り中納言のとおり語ひてんは
のことさへふ八御家のものいかもつり目出度はもんなと
こふしかならなる時杉田光通にむかひ作法みはし哉
爰は妙々ましして御文におくれ語へもなる代の名
とは志らしめされはまし某いやしきよりかくまでに
めし語りもされはへもよりしなる代の名とは志りては
大殿のちやしかくれ語ひしことこそ御家の久しかる
べきなれとなみはへいいうぞかりのでたき御事とはなかるべく
なる代まで御家人ホ一人とてなかりてあまたちはへ
ぬきもやまてそととひはひつれなんなしあやうきいこと

ことまでははひしとはかの光通はしかゝる氣色様に
て見へなかむ芦田図書といふものは其段みなさる比へ
とやさしうと申述ぬる事をありしかば光通殿
とたちて奥へ入せしに某段もとなりあまかへる
とみつうら門をさして罷て出まいはへりと皆くいへと
なれことありしきあけの日光通より近侍を使として明
日申されしことを文上が怒り見えしさるに申する
がんなきぬと申しなとふ氣色みえしあらそれて見へてなる
でようしとかはめくらすにも某段なりそいは語りかくまで
きおもへはなもく悦入てとかく何之さらはなる機嫌
取ずし中あそうのなかぬ料理語らずしとありて某段も
倶て涼しくてかゝるにありてまゐるそれはかの某は大殿

の病気は他の人にすぐれてひしかばいかにしてかく
の病患のなどとむらひ気をつかせんとあけくれに気じ
ゆるにいたりたるしほどにおしてゆるかゝる有のやうて
いひりてとゞめられてかゝる治を見るとて渺といひて甲
斐ある代をもあひゆるとておほせしてかり

一 忠昌のとり立給ひし家老に坂井といへるものあり
なるを作す大力のものなく忠昌江戸へ参らんとて在
ときおて弧酒にて抱人の様子をうかゞひしとて坂井くみとめ
て伊予守殿大傷寒にてかへもちてふとしまゆり放る療とく
もへゆるしと江戸に伺進しつゝ国のことよろしく旅宿へ入
き気ふすつる国にふ力ある人の紀礼し給ひしかばよの老
の人幾人まてをともへうちふきと坂井なやすくとり

ありめくらすそのうちに大病なるを始一門中ゆかりし
て跪来る坂井出むかいて大傷気にて人々色もなし
まゝにすさみて病葉の来るしいへも自て癒給ふを
ふてちやう治療あれといふ一日も気らんとのぞむ
に来らし中出ますも給へりしかたるにとよひには
来給ひて人ゝにはとうとうけ申すなりしかえていと
いひしかとにかあらし皆くゆかしといふ江戸より服須
吉竹とつうもさる忠昌の医師にゐ贄吉哲といひ
しは延寿院道三の弟子にて名高き事なりし
ろ出あいて伴ひし大傷寒にて人々色あらはし此薬
と用ひゆひしかばほどに人色かろくゆへこそ給へるとも
ふんせて皆々給へとひらしき傷寒にゆいきてみらるもなかや

某ハ我等か気にせしか験あれハこそかくの如くに給ひける
事と思ひしさらむ時なる帰国し給ふんなきせんなし
とうちやくし仰らるゝ給ひて けふし申させ給へ
とて帰すかくて五十日ばかりありて美作あしやうふ
死給ひて仙菊か母かきてそこふおくりしと覚へし
かいかにやまとの給ふ坂井家ハうしなてまじませ
しきうちとめてそうらいて此へ今ハかとしやく
江戸に入らせ給へとて仕して有ふ江ふ納戸とかし
ひらきて参り給ひける程まて一族なともしめ近く
来りきしにつねすこしそれハ世の人あられかきや
豫州ハ死給ひ乱世しと世覚えしかさはえんめぐと以し
とある老中の女給ひてもけきハ楚忽のこそとの給ふ

かふ伴五との乱心ふらんに蹴おの家中ハこれまて
くいうふ明ふけきなるしやハといかさしふ又の人大さふ
拙くれてあふとふき淳説とやせしまぞ恐る不覚
のふゆひしと沙しけり此る世ふ步色しかハとめ
つゝけ人の和気とりあこよのふゝつなふみするそ
ありしこと坂井も忠昌のよふまいりてとりあけ
てつりそれしか此時甘つめ切とゝそしきれかさと
云寓とふ云寓か事と典語とりあるうきハ四五
ふの二刀そあふ之て侯ス

一 一伯ま本多丹波とと一時ふこそ使へしとて永見か家
へやり給ひて城ふて子鐘とつらで一時きり入とうう
るふいひつけ給ひしかつき鐘てつく忘めすし此掟き
ま

にむかし御城ゟ矢大にて御城へ入させてやうまゐに
老中にくいはしられハ町人へくだされ大かたは
中よりれなし たる御材木ハ御用にもちひられしが
殿といふものにれしたる事のたるに後日夜の御もちの時
しと御屋敷に用ひられしこれハ古きものにとおさら
矢木ハ台徳公ハ御女院にて後に堀田加州も従がう
ありしを上意に勝るにて流へるにといひしか
とれりて

二 台徳公布施漂流にうかせられて 七八度めに鴨を射
させらる 大猷公ハ初日に二ッ九 下馬にて 堀にて鴨を射させられ
より水に流て岸にうちあげし之甲矢をもたてゝ乙矢を
うけもと射落す 其日背に 御ほうびのよしを

一 御旗本ハ出座にのしめのまぐしに紫ゆひて之ふじ
のとき台徳公の時 色々に御用に白小袖之かしら紫
までるふあるいは家之を一統さ以て指に増上寺に
のぼる事ハ大猷公ハ時分の時より

一 大うで板とよふハ台徳公の御乳母之贈女にてけふやへも
小姓衆もくきれて 広ふ茶碗をふるまふ時 切に食を入
きてきつうのもちて ゆくゝおもふらうる 一日に二
三度てありあまり時に本作州ゆきし時もつらくもちて
おふれしかこれハとてとひしかハあしきものに作ありなども
それハ人に 御好られて御流して有つさき路ひとつかず
とりつ時に作法とちハむかしをやきれて そこにがあり
しとみゑけり 役人もむかしはなおれしとおもひおされ

てはかなくしさみにはふるきのことゝいはれしは御役かあ
せて隠居も退出せしとや此大かたの一事大名一年やかく
はるいのだしみて御せんざの時此日此某は羽織きせとやれ
ひしに帰しる脱きし紙に囲るいとゝやすなくしとやせ
に合ほる羽織きせとゆかれどのうかうんむかしさるの
疑ふへりふすとて御追放せされ大かたもとの死病の
時うのゝ御申しあるべしとて御感ありて其れ其の
めいうかるうすそもめでたくもとふひし御ありしふかひ
ておほうめでたし御治世なんどうかね御ひふし
又申すうあかりしかハカせし御立此時三万斗
かお此時よひ返し参らせも某うかみことかまへて
御ゆるしになふ天下此御仕置と某かためにて御無ぬり

諸ひにふとりしされてそれうあかれしとや此一年かる
茶湯御意あいて稀に御拷問あれどもいるかす冀て
つかずとありしふるやしきうすといかれかふさたかはず
それすのあるかはるいことひしそれどうかるして大かたも
あかうるかるかも御尋しく

一 献ての時注欽の前に暖気御為りされしとゆさうてそ
急病のよししやすさふハ誓紙させよとありしに誓紙まず
とりの時松倉豊後守の話ありしか誓紙あるへくはれまつすだ
言上し諸べし切にそかへ雑言あて丸之てはとて御
おこあそ取て何某死去の時某か在へ三字かけしと
申せしはそれかとて死去はさうよしゝとなれ
てかし御申しとや此時雑言の事二九年あり

生れ給ふ又其のちいつまて成しや 浄信尼と申人伊集
院式部と申す菊丸との 薩摩国へむかへて妻とし
て菊丸式部とのとは申せしのち又伊集院式部と
名のり給ふの萩木ハ平田と改号して在りけれは
二男菊丸殿をつれて薩州へゆきて平田とそ呼れし
子孫薩摩国にあり 浄信尼の嫡子ハ平田権太郎と申浄念
依於時に印息ありて小笠原仕候へし つれは又それ
下事取武家の外又なり直義も末義と 改号し自斎
とよはれ八十歳まて住ひたりき

一 大猷院様の御小納戸衆 栗九郎とてありし御庭にて嫡
のときなると聞え候ともしも花に入れ給ふ
山本退出之後おとなしく又其嫡御庭になり又聞こて

としせ生れ給ふ明るに栗九郎仕ますそのゝ嫡にいふ
と仰られ後しかるし申すさてハ何とも
あるへしとて其とき生れし嫡なりしてえも住ひし
栗九郎の面の色変してあされふしぬ我部御前に物田
加賀守称木伊集院に仰ひしが申けるはかるいり
ありと申し上けるにかしらすと其れ花に
なる中こと二人共に申すすなはちしあると娘にて
其色まて仰るにかかえて伊集院とふりひてありし今
九郎に申せしは猶よりよく思ふ所ありて心ならぬ
ことともおもひれおもひてそれはそのに花みるれて
身をせしやほしと見えて花も散りしものにたれてあやなう
て花と香盤とて引ゆきて嫡てみなしまゐらする嫡のもとと

のかへ帰りまいらせ候ハやとて庭にふし歎きさめ／＼
語けしものゝ哀れにそやにしうらはいひなかし
いかにもつらき事とはいひしながらも心うりたくみ
あやしきにとあやしみたりそのまゝ消しつゝ参りへきなり
此婦語けるにもかつひ手と語あさへりしに二人とも
高殺すなりとやすきれ時に大草主膳正御刀
とりて兵をしら覚えず涙とあうして申しけれ
主膳正ものゝ

一 同し御代に御繁盛に成らせられしに其御船
中みて飛る無礼なる事ありて御家中の人
おまりてける御船の中物さはかしかりけるを
何ごとぞと尋ね給ひしにかゝるとや申しそ包みかくせしもゆ

一 かくれをしても打きるは武士はやむことを得ぬものなり
と仰られて御船手の向井将監が家臣にあるとがし出
されて池をつくるにかゝることあるべしと戒しめたまふ
どいやしきものゝおもひまで哀れに思ひしあらず
池か荒きにはあらず網ぞ船とゞめしとてやうて此船
まめしかくされ彼さうし人をとふに此の出家なりて
ゐる体なり

一 同じ御代にあたり九州表にてきしめての御乗
あそばし時人々と御酒盛し小井伊掃部頭と何
うしとか壺の論そてあひまて出来しに御船の内にての
さはがしかりしに色くしのよそてもこしめされやうて
此様にしもせしれ業なくとめて此の清らかに

伏して右筆せしもきゝ又一人ハ巳の時よりお仕して又一人ハ
午の時よりお仕して申にへ右筆の人と巳の時にお仕舞し
人とハ未の時に退出して午の時にお仕舞し人右筆す
此外に吟味も十二人にて六人ツゝ常番す御小納戸といふも女
人にて十人ツゝ常番す奥坊主衆といふも二十人ほど
すら六人といふ女中二人ハかりありきさて常憲院様
御代の御大老ハ誰のこととかあり稲葉石見守堀田
筑前守とさし殺せしハ杉戸の外の杉戸の口にありて
て御用にとて筑前守の申に新杉戸の際の縁かた
に伺候せしとよび杉戸を締め候御居間杉戸
御部屋之さしかゝしもよせしれより御栖居段り
てもうしより御居間にゆきし處を老中御用

アヤと名づけてそこに老中伺候しゐる老中伺
候の間を桐の間といひて番衆にと詰めし之（此外に桐の間の番といふもありしなり）
これより老中御前にてさゝられしる御錠口といふる
とあふ須の御鍵も外へ出されて名ゐる御掛りより（御台所へ出されし）
もうしハ老中ハ通ふかゐ申にかゝれハ杉戸の縁ひた
かきゐたる所へ通きさて伺候し杉戸をひらけハ其ゐたる所へ御出
御間なりき人さゐ老中に御申すには黒書院のたまり
ゐ居りて失られしそれよりうかゝひさるハ夕ゐたらく
御本筆アヤの縁かたにて召を御沙汰せられしにさ
れど今とも老中つきゐ候処といふところ奥と表とに
二つに分かれてありそれ表の方のゐハ黒書院にてめし
候られし所之常憲院殿御代久しきに其ころひて御小姓

めれハ何ことも思ふにまかす天性ハ清浄とかしこまることを
あまり怪しがりけれど時ありて何か酒とめさるゝことあり
しかれはつねにハ精しき酒をのみしよろこひけるに
ころ世上にハ悪しくと大草うち殿西国にくたりけしとぞ
何ゆ志千やうの事うれしく

一 松平伊豆守信綱朝臣の家にある姪若の女壱人
といひしもあやまりて信綱朝臣の招きと思ひき
てき/\とせしけるにまけ出て内室の腹ぬきさと
とひけりこゝろもしらず草履とも乞はしてにげも
まさとのほくふ之といひてかれて返して草履とらる時
信綱朝臣追はせて総将ともに出られしうき悲し
て立のかれしうちにに又たしり帰りきて悪しきのちふみの沙汰
もなかりしも月旅て後ハいくほとなく信綱朝臣呈せ
の御役承りて日光山へまかり時に彼男髪自代し旅装束
して門を出られしにもせはさて仕へするやうえ
へ此御供をハ伴しとて飛脚をはべらとおもはれけれど
を世にまかせられしおとなに日光にて此ありしに御供人一人
もつゞかず継抱し去一人彼男とそ二人ありては召
みつけたるもおかしは日光の神橋とさきつられし
時に彼男か呉とよびて宿もてなして御めかり
くひと買ふかぞといふもれて御前をゆるされたり

一 飛騨国三河原(サニカワラ)といふ所に三九二つといふ武あり 此不要害
の地なれハ金森殿炮二十挺あづけ置かる元禄中今
最后のる事ありて士民大よそところ々々此ら

不叶神事にて土民あつまるこそ心得かたしと申て城中に
来りしを召合集めし者也とて侍天の御ことに
にてふか来ぬるとりふれ集りけるに不ハ江戸より御使
の出るよし聞けるに不かの一兵衛ふあつまるハ萬事もかか
らさ不こそれハ集り来ける代に土民くりと云ても故殿の御用
より鉄炮を飾て是を飾りし不る所にて向ける立不といふ一人
も人とゝまらしとなく人と思ひ不も侍らん事にハ不知
と見ゆ屋きしめふ気色ぬかりの家老とかく大かたなるところ
さて當時かならすとやすくもつてかの所の瑕あることを
いましめけれハすこしとあるにかゝり此嫡子をもちられ
けれ城中にゆきてかくいひしみ人と又かくのことも人
のあつかさることよそふわかいひし不まことにふ不敵者と

つみふ世をのかれんにハ我かちしけ罷かへむり御とも父ととつ
みせられても我かたちまち絶ゆへかならすともしけり
ふしみちりかゝる大事とのべしことなりハ少年ハ血気
しておもふかのにむ御しうしろ家の為
とて父のことおもはるゝと庭訓して立ちも
て三河家にも水をあけて死しけりと因語志ハ第
加註之

一 本多平八郎死去し時追腹大岩三平と云者草履取
又追腹辞世
死ぬるとふあふ死ともあさりとてハ君の恨ハ今ハうらめし

一 西月十二日の御連歌の時ハ神君いまた参州駿州斗御
領知の時元日の夕三の箆御とりとり夢想て見られ

富士の山みてかいたくひたり　紹巴に筆をひかさせ硯まで
ことはりと祐もへの物語り申上けれは其時夢想をあり
くれらと上達して求め上けり筆と硯もくきあるし
翌年　甲斐国の里に入けり其の次第例えとふ
連歌師の役なり

一 今原より今までの領地之河越江戸駿河甲斐信濃と
上ケ小田原北條武蔵伊豆相模上総下総上野の国
従ふけり先と江戸に御うち入となり

一 本多伯耆守信に平野市太夫とて名高しきる人
ありけり此人兼元作なるの銘刀を拵けり角(スミ)野其の兄といふ
とうもや本の作ともしらぬ目利にて世にもてはやし
たり或時此刀を其兄に見せけるに其かいの出来誠に

形り恰好ある所あけれども又切ありて拵料に
なしぬも其兄痛直をするの上に所れも某ましまいらす
向きほどに其の上に拝されて外の刀を求られよとの事
太夫きって刀様拵は武士の一代一度の用に立んとての
たしなみなるに痛と也しくるかなをもふずして求
得し人大分の価を出して求めるもあらん時は我等
けらんは大十みさるなりとて其まま捨置して
市太夫舎弟紀州の中家人にて何某といふもの在けれ
ありてきって兼元の刀を除きていふ市太夫がいふ
又切ありて拵料になりぬといふとはそれ方と成し
のことなり其まを聞て後には其の兄に痛也さは拝みんと
なりけり其れは武士の本意にあらずとて舎弟の兄

一 穴八大模様のやうなる事を昔ハ誰も評定せしが
給仕ニ出たりけるが穴八ニ定めたると水戸黄門公
夫婦御手づから丹後の思ひ染ニ書きて芭蕉と
大きく縫もせ定めしめ給ひしより世ニ行れしと

一 平帯ハ琉球人の楽童が常に着るを宿堂衆が見習
ひとりのこらずひしより流行りしハすべて丸くけの帯と

一 大神君御一生の内御吉日三ツ九一ツ御吉日として
御用ひ遊ばれ一とつふハ御生まれ日なり是よりして御
生まれ日より三ツめを以てふたつめ九ツを以て八ツ九ツめなり
此日御陣立ニ御用ひ遊ばされ由畠山殿ニ御答物語として
鈴木小左衛門云此畠山殿の大坂御陣の時十三歳にて
死ちたりけ畠山氏ア度ハ此後なり

一 天文十三年三月ニ江州大守佐々木義賢諸士ニ命じ
て軍役人より年貢無して国内ニて先規より有り来る
鉾ニ組合と名付して新鉾を作りて用ひ是を恵比
の鉾一なり軍用利用として此佐々木蔵ニて下知
究めて鉾をおくす江州ニて是れありけるを此佐々
鉾といふと云 或人云近江の高八十三万二千石余を
とりて是を八合鉾にもとれも高四万石五十石余より
なりぬ家中三ツ割ニ成りして渡しぬれど人数
多くもなくなりたるにもなりといふ

一 悟はハ八幡太郎知ゆえて父ニとくらし孤独なりし小姓方
ニ叔父大膳四五歳にて親父なり後見して其子の後十七
歳のころ家督を継ぎ七歳にてなるまで十年ニ余